

書写書道教育の留意点と大学教育における実践

岡村 浩

一、「書写」の指導計画・実践例

小学校の書写は、学習指導要領において「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」、そして「言語事項」という三領域一事項中、「言語事項」に位置付けられる。日常生活で話すことや聞くことと、書くことは表裏一体の関連性をもつわけである。しかし実際、「書写」というと、どうしても特殊な学習内容に捉えがちになる。筆や墨・硯等極めて非日常化したつある筆記用具を使うことが主になっていることが第一、そしてとかく学習内容が、巧拙の尺度に偏りがちな点に起因する。この問題をよく含んだ上で、児童生徒が前向きに取り組めるような書写の指導例の一端を掲げたい。

教材「うみ」(中学年向)

段階1 一文字ずつの分析

「う」 ①概形を掴む——縦長。②二画目の筆運び——終(収)筆部は細くすつきりと引きぬく。

「み」 ③概形は「う」字と比べ正方形化する。④一画目は一度筆を打込んでから筆が紙を離れるまでの運動性が長い。⑤二画目のはらう角度と長さに注意する。

②④は、技術的な難関になるであろう点。②⑤では鉛筆と違い、一本の線に太細の変化が生じることにも気付かせたい。

④の表現は、短い横棒(横画)から一度筆を止めてかど(折れ)を作

り、次に長い斜画に移る。技術上最大の難関・ポイントは、丸く狭い面積を作る「むすび」部分である。この小さなマルを表現するとき、筆先の毛がよじれ、また毛の多角的な活用が必要となってくる。⑤は簡単な表現にみえる箇所だが、指導要領にある「字画の整え方」という字形構成の生命線を握る重要な一画となる。

技術的な内容が伴う筆運びについては、反復集中して部分を練習するのが効果的である。

段階2 全体の練習

① せっかくな一文字ずつよく書いていても、二文字の中心が揃っていないと全体感に調和美が失われるので、上下の中心を通すことを第一に大切にす。その際、中心線の目安として半紙を折つてもよい。

これが指導要領に記す「字配り」に関する留意点である。

② 用具の準備や片づけの時間を考えることと集中力を考えると、教材の揮毫で授業が終了すると思われる。あとはポイントをおさえた上で、「書き方」「文字の大きさ」等を指導事項として錬度を加えるが、三年時で毛筆が初めて導入される背景をかんがみ、中間学年では毛筆への敬速度を少しでも緩和するような、のびやかで素直な筆運びをするよう指導したい。

③ 小筆を用い、氏名を左側に記入する。小粒の文字を筆で黒くつぶれないように、またまっすぐ書き揃えることは難しい。しかし日頃鉛筆等で書くときと気分的にはそう変らないように、硬・毛の関連を意識して書きたいものである。

教材「海」(高学年向)

段階1 まず洋紙と鉛筆を用いる。

① 筆順（書き順）の確認。各々鉛筆で書かせる。文字には正しい筆順があることを全体指導する。

② 文字の組立てを考える。左右に分かれる偏と旁から成る文字であること、さらに部品の名称（部首名）の確認——この場合「さんずい」について。次いで「さんずい」の付く文字を他に数例ずつ考えさせる。それらに共通して見出せる字義——主に「水」に関するものによく使われることに気付かせる。

段階2 手本・参考資料をみる前に一度自由に書かせる。——字の大小や配字・字形・線質・全体感等の面で様々な書きぶりの作が出ると思われる。書く速度も異なる。書き上がった人から、周囲の作と自作とを見比べる時間をとる。自分の書き癖・特徴を大掴みで捉えたい。

段階3 手本・参考資料を配る。

① 要点を押さえる。形を整えて書くポイントの一つ——偏と旁とで成り立つものの多くは、偏が旁に対して面積が狭い。あるいは、画数の多い部分（文字）の面積が広くなるのが自然である。

② 「さんずい」の三画目、打ち込みの太さから徐々に細くなる。終筆の向きは、次の線・旁の第一画を目指している。「✓」と日常書くが、「硬筆による書写の能力の基礎を養う」ための毛筆指導であることを意識付けたい。

段階4

① 「海」に関する思い出・出来事を洋紙鉛筆でごく短い作文にまとめる。巧みに書くばかりではなく、季節感や感情移入を加味する表現上の要素が書写学習にあること、また、正しく丁寧に書く硬筆の学習目標も含む。

指導計画を作成するに当って

- 毛筆と硬筆とを一体化させる関連的な指導の工夫。
- 文字に関する事項（筆順・部首名・漢字かなの調和）を中心に、言語に関する他領域の指導内容とも関連付ける。

その他 留意点 配慮事項

- 正しい姿勢、筆をまっすぐ立てて書く。
- とめ・はね・はらい等厳密に比べると活字と手書き文字とでは、細部に多少の差異がある。筆で書く際、誤字にならない許容範囲が広がるので、この点を指導者は予めよく理解し、教材研究を行う必要がある。

付記 用具理解の一助として導入時、「最大可能な太い横画」「最大可能な細い横画」を一本ずつ引く。どんな工夫をしたか問う。圧力（タッチ）・墨量・運筆の遅速によって、同じ人が書いても表現に幅が生じることを実体験させる。芸術的感覚の学習というより、鉛筆やシャープペンシル・ボールペンと筆との性能の違いを理解することにつなげたい。

二、文字の指導計画・実践例

学習指導要領（言語事項）に示す文字には、

○平仮名 ○片仮名 ○漢字 ○ローマ字
がある。さらに「文字に関する事項」によると、これらの指導内容について

① 平仮名・片仮名の読み書き、片仮名の文中での使い方は低学年（第

一・二学年)に重点化された。

② 中学年(第三・四学年)において漢字の偏、旁など成立ちに関する知識が盛り込まれている。

③ 高学年(第五・六学年)では、仮名および漢字の由来、特質などについて理解すること、つまり中学年の初歩的な知識から一歩発展させた学習内容を求めている。

また漢字の読み書きについては、各学年別配当漢字として第一年(八〇字)、第二年(二六〇字)、第三年(二〇〇字)、第四年(二〇〇字)、第五年(一八五字)、第六年(一八一字)を明示、「読み」は当該学年、「書き」は一つ前の学年までに配当されている漢字を書けるように、そして文や文章中使えるようにとの指導内容となっている。

〈指導計画〉

新出文字はその都度ドリル形式等で学習するのが一般的だが、棒暗記の繰り返しにならないように、例えばとくに〈文字に親しむ〉時間を設け、読み・書き・成立ち等を総合的に学習する機を作りたい。

〈教材例と実践〉

冬(2)の一(1)日(1)としては暖(6)かい朝(2)、早(1)起(3)きをして散(4)歩(2)に出(1)た。すると、久(5)しぶりに友(2)人(1)Aと会(2)い楽(2)しい会(2)話(2)が出(1)来(2)た。(カッコは配当学年)

指導例1

右の文は、漢字を可能な範囲で用いた例である。次に同じ文章をすべて平仮名で書いてみる。

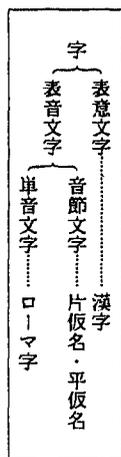
ふゆのいちにちとしてはあたたかいあさ、はやおきをしてさんぽにできた。すると、ひさしぶりにゆうじんAとたのしいかいわができた。

となる。文が長くなるとともに、平仮名ばかりにすると意味が取り難くなる箇所も生じる。つまり、日頃何気なく使う漢字と仮名の並用について、漢字の利便さ(時間的な実用性)や仮名との調和性(読みやすさ)に関し、改めて認識を深めたいものである。

指導例2

漢字はそもそも一字で音と意義を表す「表意文字」である。対して平仮名・片仮名は音だけを表す「表音文字」。わが国で最初に用いた文字は中国伝来の漢字であり、のちに漢字を表音化した万葉仮名が創始され、さらに省略化が進み平仮名・片仮名が作られた。

五十音すべてに言及する必要があるが、数例「安」↓「あ」↓「あ」、「以」↓「い」↓「い」と、漢字から仮名が誕生してゆく変遷を图示することによって、漢字と仮名とを相互に学び使用する必然性について理解の一助が得られるであろう。



指導例3

「一日」を分解して

① 一「一」「二」「三」と横棒を重ね数の違いを表している。
② 日 太陽を「日」にかたどる簡単な絵文字として表した形が元になっ

ている。

今から千九百年余りも前、中国漢代の許慎が字書『説文解字』を著した。当時通行した九千程の漢字の意味や使用法をまとめたものだが、それらを

○象形 ○指示 ○会意 ○形声 ○転注 ○假借

の六種類——「六書」に分けている。あらましを窺うには『中国書論大系』（第一巻 二玄社刊）等専著を参考にすればよい。実際の授業ではいくつかの字例を紹介し、単調な漢字学習にならないよう子供の視点を集めたい。ちなみに

①「一」の例が指示文字で、無形や抽象概念を記号化して象徴的に図示したもの。②「日」は象形文字で、人の体・自然・動植物・建物・道具等をかたどったものがある。



指導例 4

部首による分類

① 偏	暖	ひへん	話	ごんべん
② 旁	朝	つき	散	ほくによ
③ 冠	雪	あめかんむり	冬	ふゆがしら
④ 脚	無	れつか・れんが	志	したごころ
⑤ 構	門	もんがまえ	国	くにがまえ
⑥ 垂	雁	がんがだれ	病	やまいだれ
⑦ 繞	起	そうによ	建	けんによ

このように部品に名称を持つものがある。解字して部品化したもの同士を組み合わせ、いろいろな漢字を作り出すことを行うのも興味深い。

(側線は前出文にある漢字)

	こ(こへん) 子(こへん)
☆頭の大きなあかんぼうの形。こどもにも関係する。	字(あかんぼう) 子(こ)
	孫(こ) 季(こ)

部品に各々意味があり、文字全体の仕組みの上で重要な鍵を握っていることにつき、右のように整理して説明するのも効果的である。

指導例 5

字を書くときの順序を「筆順」(書き順)という。大事な決まりとして

- ① 上から下へ書く
- ② 左から右へ書く

を挙げるが、手書きをするのに合理的な約束事である。他、いくつかの決まりがあるが、大きくゆっくり実際に書く練習を通して体得させたい。先に部首名に触れたが、「衤」(ころもへん)が「衣」字からきていることを説明すれば、「衤・ナネネ」と書けるようになる。理由づけも出来る範囲で、ときに織り混ぜたい。

指導例 6

漢字の音訓読みについて

その他

片仮名は一部平仮名より早い時期に整理された歴史があるが、現代において片仮名表記の氾濫は問題として指摘されるものでもある。使用する場面への配慮が必要である。

おわりに

各人の氏名を扱い、上記の学習内容を総合的に捉えることも、文字を一段と身近で魅力的な存在とするための手段である。ローマ字表記の学習面でも有益な成果が挙げられよう。

三、大学教育での実践

小学校国語科「書写」指導能力育成のために、大学では「書道講義及び実習」(1期十五回 2単位)を担当開講している。時間内での指導する内容は当然極めて限りがあるが、前出した部分に関係するような講義内容につき、引き続き揭示分析を行うこととする。

〔平成十四年一月七日(月)〕

冬期休業明けの第一回目の講義である。年末の課題として賀状投函を指示。近頃では書道関係者からの来信すら、表裏ともに印字のものが珍しくなくなってきた。受け取る側の心情からいえば、同文の場合、やはり手書き・肉筆のものをもろう方が相手の心や思いが伝わってくる。そして行間に、その顔や折々の表情が窺えてうれしいものである。要は巧拙よりも、手書きが日常生活で効果を発揮する場面がここにある、ということが大切で、一般にこの点を気付かせたい。

課題の賀状は、宛名表書きは毛筆墨書、内容は木版画を一部用いるようにする。書が主ではなく、絵画やデザイン的なものであってよい。個性的・独創性に富んだもの、手作りの味、温かみのあるものを目指す。作業には二時間をかける。作り始める前に、これまでの本講義での制作例を鑑賞する時間を設け、参考に資する。

年明けの講義の冒頭、この賀状の出来栄えについてのコメントから導

入部とする。残念な点は、せっかく時間をかけて作ったものでも、ほんの数枚しか発信しない者が多かったことである。これに関し、日頃手紙のやりとりを行う慣習が乏しい年代でも、せめて賀状や見舞状等伝統的かつ実用的なものに注視させる意識を喚起する必要がある。

さて本時の学習内容の中心は、

〔初夢〕二文字を半紙に書くことである。

久しぶりの揮毫であるため、毛筆のコンディション、腕のウォーミングアップ等も兼ね、基本点画の練習をまず行う。

● 筆は自然に太細・潤濁の変化が生じる筆記用具であり、そこが難しくも面白いところであることの確認。

● 如何なる二文字を書く場合でもあてはまる、巧くまとめるコツ——二字の中心を揃える。

● 墨を筆にたっぷり含ませ、起筆で弾力を確かめ、のびやかに元気よく書く

一枚書いたところでの確認 全体指導

● 筆順、とくに「初」字のころもへんについて、一人指名して板書させる。「ネ」(しめすへん)との違いを併習。点画一つの増減によって名称、働きは当然変わってくる。——「神」字等。

書き順を意識してもう一枚書く。清書。

最後に全員前に書き上げた作をもってきてならべて合評を行う。

後半

各人二文字を題材として授業を行うものと仮定し、略案を書かせる。指導案(略案)を作る際の留意点。

● 流れの構成

● 山場、みせ場の盛り込み方

工夫事項。自分の得意なことを生かす——書を離れたことでもよい。導入部として、相手を前向きにさせる素材として。

● 評価の観点・方法

何を指導しなかったのがここに反映される。翌週までに指導案を書きまとめてくるように課して本時は終了する。

〈二月十五日（火）〉

課題とした指導案をまず提出させる。

目を通して模擬授業者二名を選出する。

受講者は自らが決めた二文字を練習する。

講義終了前、模擬授業者二名を発表。打ち合わせを行う。他の受講者へは添削した指導案を返却し、次週までに書き改めさせる。

〈二月二十一日（月）〉

社会科学専攻（三年生男子）

国語科専攻（三年生女子）

二名が模擬授業を行う。受講者には授業の感想について、「最も興味深かったこと」〔黒板の使用法〕〔範書について〕〔助言する点〕〔総合的に〕等箇条書きにするよう指示。これを提出させて終了。

〈二月二十八日（月）〉

模擬授業内容の検討を行う。

授業者から手応えや感想、反省点をまず聞く。

続いて受講生からの質問・意見交換の時間を作る。

時間配分 一枚書くのにどれ位時間がかかるか。また、受講者の集中力が継続する時間範囲も考える必要がある。

ポイントの明確化

とくに伝えたかったことへ対する時間のかけ方、及び全体の流れの中での位置付け。最も多用された言葉とは。

工夫事項

文字の成り立ちについて、起源に遡って説明。日頃余り意識しない視点の提供によって、新鮮な気持ちで受講者は捉らえていた。導入部に用いたことは相手の興味を喚起する上で効果的であった。

範書について

影響力が大きいので慎重に考えたい。教科書の揮毫例もあるが、今回の場合のように後半各自に自由な課題を書かせるならば、机間指導中ある程度の示範が相手の要望に沿って出来れば尚よい。

また教師の熱意や個性を伝えるためにも、手作りの揮毫例をプリントし配布することは大切である。とかく教師自身、一度も教材を書かないで授業に臨みやすいが、課題として選定した語句の難易度を揮毫することから体感するのも重要である。ただ、手本として捉えられるものであるから、ほんの少しの線の長短や角度の問題等、生徒は真似することが多い。プリント配布するものであれば、予め何度も練習することが出来るので、しっかり書いたものを範書例として使用したい。

今回、黒板に大洋紙を貼り、そこに大書してみせることも行われた。相手を注目させる上では、また大人数を対象とする際に効果的である。

こちらは生の実演であるため事前に練習を重ねておいても、さらに難しい面がある。垂直なところに文字を大きく書く、という特殊性をよく認

識してのぞみたい。今回の授業者は、体で紙を隠さないように立つ位置を考えながら、そして一点一面充分間をおき説明を加えつつ、相手への視線をやりながら行えた点は評価出来る。折角体を張って、時間をかけて行ったものであるから、全体指導の教材として書き上げたものに、例えば色チョークで注意点を再度書き加えるなどして範書作を活用したい。

「書」が中心にあること

「成人式」という時事社会行事を取り上げた話題、自分の専攻に近づけた内容等様々なものがこれまで（年間六名の模擬授業）あった。今後、総合学習中での書写書道と多領域学習との接点・融合性を積極的に見出す必要がある。その際、文字を手書きで学ぶ特殊性・楽しさ・基本事項をおさえることをもろさないように考えたい。

言葉づかい・話し方について

○声が大きくて元気がよく、堂々としていてよかった。○面白かった。○先生がすごく明るく授業を受けている私はとても楽しかった。安心して見られたのですごくよかったです。○声も大きく、自然と授業に引き込まれていった。狙いもはっきりしていて、どこに注意して書けばよいか、きちんと頭にあった。○少し言葉が自由すぎたが、テンポ良ききやすかった。○友達感覚の語り口なのは親しみを感じよいが、余りくだけ過ぎるのはどうか。○声もよく通ってかなり上手に思った。

以上は受講した学生から提出された（全体を通しての感想）である。授業の全体感を決する重要な要素として、「話し方」のウエートが大きいことが窺える。生来の声質はあるものの、雰囲気作りの第一手段たるものに発声が挙げられることをよく念頭におき、人数や空間にふさわしい声の通し方を心懸けたい。

まとめ

途中述べたように大学の講義における、一週間に一度九十分のうちで行えることには限りがあるが、なるべく系統立てて実践的な内容を含むよう努めている。

総合学習の進行と書写書道教育の将来を重ねて考える上で、大学の研究職たる自身の意欲と現場の実状との距離、大学教職員、一般学生内での書教育・書文化への理解、現場での書教育をとりまく他教科との関係等考慮すべき点は大きい。筆者自身の結論としては、国語科の中での文字に関する学習事項との緊急密度を高める工夫、文字を書くことには実用的な面の中に「美」的要素が生じるものでもあることをとくに意識して、書写書道教育に積極的に関わっていくつもりである。

付記

次頁に附属学校における「ようこそ大学の先生」（H13・9・18実施 四年生対象）授業レポートが『大学学報』（二六六九号・表紙）に載ったので転載する。研究成果発表の好機と捉え、また現場の実状を認識する上で貴重な時間となった。



新潟大学学報

第 669 号

平成14年 3 月 1 日

新潟大学広報委員会
新潟大学総務部 発行



岡村 浩先生の毛筆指導



滝澤かほる先生のリズム体操指導

～学部と附属学校との連携研究を目指した取組～

本校では、学部との連携を大切に、その推進に取り組んでいます。今年、学部に向けて学校の扉を大きく開きました。連携が研究主題「学びをつなぐ～子どもがつながり感覚を働かせる授業～」の具現に貢献することを期待します。実践者と研究者とが連携することで、知識や技術の一層の構造化を図れるからです。今年度の主な取組を紹介します。

「ようこそ 大学の先生」に賛同していただいた学部の先生に、専門分野を生かした授業をしていただくことができました。毛筆では文字の成り立ちや運筆の基本を、リズム体操では身体表現の技術と楽しさを、国語では夢の物語を通した文学の世界への誘いを、特別活動では仲間が存在する意味や価値に目を向けていくことの大切さを、社会科では日本国憲法にかけた日本人の願いを、子どもたちはそれぞれ学ぶことができました。初めての試みということもあり、大勢の保護者が参観されました。「子どもより親の方が楽しみにしていた。」という感想。連携に対して保護者も関心と期待感を高めています。子どもたちも、来年度の「ようこそ 大学の先生」を心待ちにしています。

校内だけで行っていた授業研究を公立学校と学部公開しました。学部の先生方からは、ミニ講座をしていただいたり、協議会に参加していただいたりしました。分析会では、本校の職員と共に子どもの実際に迫ろうとする学部生の真摯な姿に感動し、連携の大切さを実感できました。

小学校体育リズム体操の共同研究にも取り組んでいます。学部の先生は児童に実技指導を、本校職員は児童の実際を学部資料として還元する共同研究です。今後は、他の教科でも共同研究を進めていきます。

来年度の教育研究協議会では、学部の先生から授業を公開していただきます。これを機会に、児童と職員だけでなく保護者とのかかわりも視野に入れた連携研究を指向していきたいと考えます。

(文・写真 新潟大学教育人間科学部附属長岡小学校 教頭 佐藤 春男)